教文通信

発行所
長野県教育文化会議
発行人
寺尾　真純

教文通信写真館　アオゲラ　2023_04_09 飯田市上村

写真とエッセイ：木下通彦さん（生物教育研究会　飯田 OIDE 長姫高校）

声を聞き見上げると、そこにはアオゲラが　（エッセイの続きは7P）

今号の記事

01-04
第3回総研報告 Part 1
04
第2回教文運営委員会
05-07
教育のつどいレポート紹介
「対話を促す授業づくり」
08
支部教研一覧
書籍紹介
教文会議当面の日程

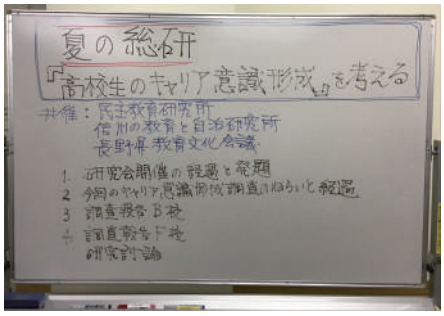
高校生が自らの人生を主人公として歩む

「高校生のキャリア意識形成」を考える総合研究会

総合学科は高校生のキャリア意識をどう形成するのか
普通科の自治活動はキャリア意識形成にどう貢献するのか
「教育改革」が進められる今、そこから何を学ぶのか

第3回総合研究会報告 Part1

民主教育研究所　中教研報告と現場からの報告・討論で「キャリア意識形成」を熟議



2024年7月27日（土）の午後、松本市勤労会館において、民主教育研究所中等教育研究会（中教研）・信州の教育と自治研究所（自治研）・長野県教育文化会議（教文会議）の3者共同開催で表記の研究会が実施された。参加者は主催者を含め25人であり、会場はほぼ満席であった。開会行事に続き、7つの研究調査・事例紹介が順次、発表された。

■発題　研究開催の経過

◎最初は自治研の原貞次郎さんである。「民研調査から何を学ぶか」として過去3次にわたる民研の調査内容を報告し、それらの成果に基づき、少子化が劇的に進行する現在における、第2期高校再編などの問題点を明らかにした。

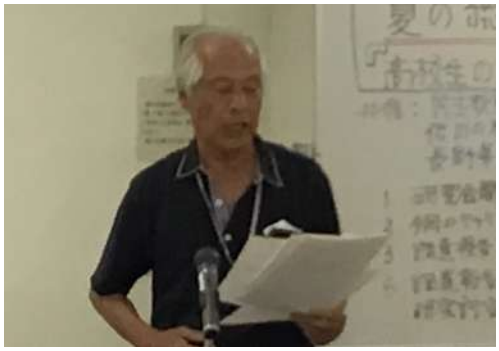
1回目の調査は1994～5年に長野県上田市周辺の7高校などを対象とし、「現代企業社会と学校システム」という名称で地域調査が実行され、報告書が刊行された。そこでは権利主体としての子ども、地域内における高等教育機関（大学・専修学校など）の設置、中下位「ランク」の生徒たちの学校生活と職業技術教育の見直しと復権が提起された。

民研調査の2回目は2002～5年にかけて長野県望月町・望月高校と埼玉県鶴ヶ島市を対象に行われ、「地域高校・新設高校の「困難校」化と基礎自治体の取り組み」の研究

成果は『民主教育研究所年報』6号に詳述されている。提言の中で、都市化の進行と通学圏の拡大、都心と郊外の明確化により地域の共同体的な力が衰退してゆく中で「学力」よりも「地域に根差す教育」の大切さ・地域と学校の双方向の交流などの実践の成果が報告された。

民研調査の3回目は2014～22年に「高校におけるキャリア意識形成」という研究課題を設定し，塩尻志学館高校（以下、志学館）・松本美須々ヶ丘高校（以下、美須々ヶ丘）で調査が行われた。その成果は『民主教育研究所年報2022（第22号）』で詳細に報告されている。生徒のキャリア意識の形成にどのような教育活動が関与したのか、総合学科と普通科という校種の違う高校での調査で明らかにされた。その内容については、この後の発表で詳解された。

調査によって、実証的・実践的に多くの考察がもたらされたことを成果としてあげ、地域と並走する学校経営・地域高校の存続などの問題を提起した。総合学科と教員の多忙化、生徒の自由自主とキャリア意識形成、学びの改革と第2期高校再編，総合学科に関わる文科省の教育行政の姿勢など、考えるべき事象は



多い。今後の教文会議の研究活動にも大きな示唆を与える問題提起がなされたと思われる。

（原貞次郎さんの発題全文は、教文通信デジタル版№32に掲載しています。教文HPから）

■民研　中教研レポート①
調査のねらいと経過

◎大東文化大の阿部英之助さんのレポートは、「今回のキャリア意識形成調査のねらいと経過」という題名で、民研の3回の現地調査について、「『学校づくりと教育づくり』（2005年）の発刊」・「青年期教育から総合学科へ」（2008～10年）・「総合学科研究へ」（2001～17年）という3つの時期と内容に整理された。

この間の科学研究費助成事業の基盤研究（B）（2011～13年度）では、総合学科334校を対象として、学校要覧や各校の教育課程・「産業社会と人間」の授業内容から、総合学科の職業教育度（教育課程で専門教科の占める割合）、統合母体校と総合学科の編成の関連について明らかにした。

さらに基盤研究（C）（2014～17年度）では、「産業社会と人間」のシラバス分析を行い、さらに志学館での現地調査を行った。志学館のシラバスと生徒の科目選択・生徒の進路選択の相関の有無を分析している。調査結果により、1年の「産業社会と人間」、2年・3年時の総合学習や進路ガイダンスなどがキャリア意識の形成に寄与しているが、それ以上に生徒の普段の学習活動が進路意識の形成に影響を与えていることを明らかになった。

次の基盤研究（C）（2018～23年度）では名古屋大教育学部付属高校・法政大国際高校・神奈川県旭丘高校（私立）で研究調査を実施した。そこでは「キャリア教育をする授業」・「キャリア教育を志向しない授業」とキャリア意識形成などの連関を調査した。2019年度から、新たに美須々ヶ丘高校を研究対象とした。美須々ヶ丘では生徒の自尊感情とキャリア意識、進学就職指導とキャリア意識の形成などの関係性を問う全校アンケートなどを実施した。

続いて基盤研究（C）（2021～24年度）では、前述の美須々ヶ丘で調査を継続した。「年報」

を刊行し研究を公開している。以上のように現時点での研究の積み重ねが紹介されたが、今後も旭丘高校での調査も継続し、さらに高知県太平洋学園（私立，定時制通信制）への調査も予定されているという。

今回の研究会の前に志学館へ10年ぶりに訪問されたそうで、そこでの聞き取りを通して、志学館では選択授業の取り方に「専門教育を薄めた科目選択」と「専門教育を深めた科目選択」の双方を選択する生徒が存在し、授業の内容よりも、生徒が授業科目を自ら選び、自ら学ぶ在り方がキャリア意識の形成に寄与していると、最後にまとめられた。

■民研　中教研レポート②
塩尻志学館高校での調査を通して

◎民研の中等教育研究委員の原健司さんの調査報告は「A県総合学科B高校の「キャリア意識」はいかに形成されるか」という題名で、志学館と美須々ケ丘での調査研究の詳細が報告された。

志学館では民研が依頼したアンケートを1・2・3年生の5月と1月に実施。アンケートは当初の「職業意識」質問項目に加えて、「キャリア意識」質問項目を追加した。追加した質問は、入学時よりも「①将来の仕事や進路など自分のことは自分で決めようと意識するようになった。②自分で考えたり行動するようになった。③将来、社会に出てゆくことに自信を持てるようになった。④自分の意見を持てるようになった。⑤うまくいかないことや失敗することがあってもねばり強く取り組めるようになった。⑥職業や進路に関心を持つようになった」の6問で、回答をもとに、キャリア意識によってG1（強い）・G2・G3・G4・G5（弱い）に分け，数量化3類で処理し、5グループ化した。この質問項目は高校生の成長を見極めるには、かなり有用な質問と感心した。

分析を通じて「産業社会と人間」「キャリアプランニング」「キャリアデザイン」という科目や総合学習が、キャリア意識の形成に寄与したと判断できる。また、生徒や教員の聞き取り調

＜2024教育のつどい in 大阪＞

査から、総合学科で生徒がどのように成長しているかを分析して、生徒自らが、将来や進路を自ら探究し、自己決定し、実現すべきだという自覚を持つこと、そのために汎用的な能力を獲得しようと考えていることが、調査の仮定するキャリア意識と符合することが明確にされた。

さらに生徒の科目選択パターンを非階層クラスター分析で分類し、科目選択は「理系生化型」「文系日本史型」など14の履修型に収斂され、「普通科高校の教育課程に類似する選択パターン」・「専門学科単位数の多い履修」など傾向は分かれるが、その履修型が「キャリア意識」の違いを表していないことが明らかにされた。

学校で行う進路希望調査の分析から、進路決定の時期・進路希望の揺れはキャリア意識に関与していないこと、キャリア意識と実際の進路先が関連しないことなどが明らかにされたという。キャリア意識は履修科目の選択のパターン・専門科目の履修の多寡・進路の方向・進路先の決定の時期・進路変更の回数などに関連性を持たずに育成されるという。また、面接指導などで総合学科が教員の多忙化を招いていることもしっかりと記述されている。

以上の志学館の調査研究の発表は、現在、長野県で進行する学校再編、総合技術高校・普通科の再編など新たな学校づくりや教育課程の再編にどのように関わらせて評価すべきか、真摯に考慮すべき研究成果と考えられよう。もの珍しい学科名や校名・校舎設計が先行しがちな改革・改良が、肝心な生徒のキャリア意識の成長を促すことに寄与することに繋がっているのかどうか、踏みとどまって思案すべきと考える。（常任　望月　映）

（第3回総研報告　Part2は、次号に掲載）

第27回教文運営委員会開催
教育課程研究協議会　対応　協議
現在　教育課題　報告　検討

松本市勤労会館

支部　研究会　参加

7月27日（土）、各研究会と支部教文事務局長の皆さんにお集まりいただき、第2回教文運営委員会を行いました。主たる課題は、9月に行われる教育課程研究協議会への対応についてです。

今年の教育課程協議会は、観点別評価と「探求県」としての授業改善をテーマにしています。他県では、同協議会が文科省の説明を県教委が説明する「伝達講習」であるのに対し、長野県の高校では、これまでの教文会議の取り組みにより、単なる伝達講習の場とすることなく、「研究協議」の場として位置づけさせています。総則・特活および各教科で、教文会議からレポートを提出し、文科省が推し進めようとする教育施策について、批判的検証をしています。今回の運営委員会では、その骨子について、総則・特活への提出レポートを素材に検討しました。事務局からの「個別最適化に欠落する共同の視点、教文会議が提唱してきた共通教育論や～づくりの5つの課題をベースに」という提案ののち、寺尾議長から「研究協議会の場があることは大切、なかなか学力論議ができなくなってきてはいるが、どういう力をつけさせたいのかを考えていきたい」との提案もありました。

現在の課題に関しては、新たな高校入試制度、くくり募集の範囲の変更、調査所の記載内容変更及び、「多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現」等について説明があり、経年的に課題になっている観点別評価の現状と各校対応などについても、現場からの参加者の発言等で深めました。

教育

対話促授業

―紹介第分科会「外国語教育　外国語活動」

丸子修学館高校　盛田　彩花

1「学校」という場を、最大限に生かしたい

教壇の上に立ち、授業をしていると、ふと考えることがあります。「生徒はせっかく学校に集まって来ているのに、私がしゃべっているだけの授業でいいのか」ということです。現代は様々な教育ツールであふれています。学習ノウハウ本はもちろん、スマホアプリ、教育系のSNSなど、勉強はする気さえあれば、家で自分一人でもできてしまいます。通信制の学校や、リモート授業など、集散しない形の学習もあります。わざわざ「学校」という場所に集まって勉強する意味とは何か、考えることが多くなりました。

学校というシステムには、生徒同士が対話によってお互いから学び合い、人間関係を広げていけることに最大の利点があると思います。特に英語という教科は、やりとりが前提となっている言語の学問です。「英語コミュニケーション」という科目名にあるように、本来英語の授業というのは、教師による説明よりも、生徒同士が英語を使った対話を通して、英語運用能力が伸びていくことが理想だと思います。もちろん、学校というシステムがすべての子供たちに適しているとは限りません。しかし、多くの子供たちが学校という形を選び、また社会から「学校での学び」が求められている以上、教員として、「生徒同士が対話する場がある」という利点を最大に活用しなければいけないと感じています。

しかし、授業はそううまくいきません。いざ授業で「今日はこのテーマについて（英語で）話してみよう。」と投げかけただけで、活発に対話ができるクラスは珍しいと思います。少なくとも、現在私が勤める学校の授業では、クラスが「しん…」となるか、仲のいい友達同士の雑談時間になってしまうことがほとんどです。どのような指示を出せば、対話による学習が活発になるのか、日々頭を悩ましているのが現状です。

このレポートは、対話を妨げる要因を二つ挙げたうえで、各要因に対して具体的にどのようなアプローチをしてきたのかをまとめたものです。まだまだ課題は山積していますが、ここでまとめ実践例を修正しながら、これからも対話を促す授業作りに励んでいきたいと思います。

2何が対話を妨げるのか

2-1能力的要因

対話を妨げる要因は大きくわけて二つあると考えています。一つ目は能力的要因です。英語教科に関していえば、語彙力・文法力・リスニング力など、総合的な英語運用能力の低さが、対話を妨げる原因になります。英語の授業では当然、英語を使用した対話が中心となるべきですが、知っている単語や文法の知識が少なければ、意見を述べることもできません。加えて英語運用能力の低さが、対話することへのモチベーションを大幅に減少させてしまいます。

また、教科に関わらず、「自分の意見を持つ力」の低さも対話を妨げる原因だと考えます。「自分がどう思うのか」という問いに対して、一般論を述べるにとどまったり、考えることを投げ出してしまったりする生徒が多く見受けられます。自分の意見に芯がないため対話が続かない、そもそも考えたこともないので言うことがない、という状態になってしまう場面を何度も見てきました。

2-2人間関係的要因

二つ目の要因は人間関係的要因です。実は、対話を妨げる最大の要因は、個々の能力的な低さよりも、生徒同士の不信感にあるように感じます。ペアワークやグループワークを設けても、ある特定の人物とは話ができない、また周りに仲のいいメンバーがいないと何も話ができない、という現象はどの教科でも起きている事実です。思春期の

子供たちが、不特定多数の同級生と対話することが困難であることは理解できます。しかし、授業という「建前」があるからこそ、話すきっかけができたり、そこから人間関係の広がりを見つけたりすることができるのもまた事実です。教師の一つの役割は、授業という「建前」をうまく利用し、生徒同士が安心して対話できるような環境づくりをすることにあると思います。

3 実践報告

3-1 能力的要因に対するアプローチ

3-1-1「選んで、台本を作って話す」

新課程となり、教科書の随所に対話を前提としたアクティビティが豊富に記載されています。しかし、英語の運用能力に差のある生徒同士ではなかなか対話がしづらいというのが現状です。そこで、対話の場面ではあらかじめ予想される答えをいくつか用意しておき、そこから選んで答えるという形を多く実践してみました。【例1】は本校の一学年で使用しているALL ABOARD! 1 English Communication1（東京書籍）の「Lesson 3 A Train Driver in Sanriku」の題で電車がテーマになっているレッスンです。導入部分の活動「Talk! ：次の質問に英語で答えましょう How often do you take a train?」を行った際の過程になります。

【例１】

時間	生徒の活動	教師の動き
1分	①教師の後に続き「How often do you take a train?」と発音する。 ②質問の意味を確認し、自分の答えを頭の中でイメージする。	①「How often do you take a train?」と板書し、音読する。 ②質問の意味を確認する。 ・how often～?「どれくらい（の頻度で）～？」 ・take (乗り物)「（乗り物）に乗る」
2分	③提示された例を参考に、自分の答えを教科書に書く。 ④必要な場合は、音声発音ソフト等を使用して発音を確認する。	③電子黒板に答えの例（ロイロノートで制作）を示す。(資料2参照) ④机間巡視し、質問があれば答える。
2分	⑤ペアになり、じゃんけんで勝ったほうから英語の質問をする。	⑤ペアワークを始めるように指示をだす。 Make pairs. Please do じゃんけん and the winner starts to ask the question.

（資料１：活動中に映した画面（ロイロノートのカード））

この活動のポイントは、解答を「選んで書く」という点です。回数(once,twice,…times)＋頻度(a week/ a month / a year) から自分の答えに最も近いものを選ぶだけであるため、ほぼ全員が解答を作ることができました。解答例を電子黒板に映すのは、板書する時間を短縮し、スムースに自分の答えを英語にするためです。また、自分の答えを教科書（タブレット）に書き込むことで「台本」を作成します。手元に読むべき台本があると、その後の対話活動で、しっかり読む生徒が増えた印象がありました。本来ネイティブが行う対話活動とは異なりますが、準備した「答えの台本」を自分の口で発音することで、頭の中に「自分だけの例文」を増やしていくことがねらいです。

【例２：
文化祭明けの授業での Small Talk：How was the school festival?】

I enjoyed ….　「…を楽しんだ。」
I was tired from ….　「…で疲れた。」
I wanted to ….　「…したかった。」

… performance 「…の発表」/ … display 「…の展示」
fireworks「花火」/ eating …「…を食べること」
preparating … 「…を準備すること」/
my work 「(当番などの)仕事」/ watch …「…を観る」

例２は文化祭明けの授業の冒頭で「How was the school festival?」の題で Small Talk を実施した際に使用したロイロノートのカードです。進行方法は例１と同様ですが、教科書の内容ではなく、生徒の学校生活に関連した題になっていることが特徴です。教科書の内容から離れ、このように身近な話題になるほど、「～って英語でなんて言うんですか？」と質問をする生徒も増えた印象がありました。また例１の題と比べると、解答方法に幅がある質問になっています。このような質問の場合は、センテンスの例＋単語の例を用意するようにしました。

3-1-2 音声読み上げソフトの活用

例文やタブレットの翻訳機能等を使用することで、ほとんどの生徒が文章（台本）を作ることができますが、最大の難点はそれを読むことです。そこで、インターネット上で無料使用できる音声読み上げソフトの使用を推奨し始めました。「音声読み上げソフト：音読さん」（https://ondoku3.com/ja/）は、入力した任意の英語を音声として生成し、再生できるものです。生成した英語はダウンロードして保存することも可能になっています。英語はアメリカ英語・イギリス英語・オーストラリア英語・インド英語に対応しています。このソフトの最大の利点は、任意に入力した文章をかなり自然な形で読み上げてくれるという点です。実際、教科書の本文を入力して聞いてみても、教科書付属のCDとほぼ変わらない発音・流暢さ・アクセントになっており、生徒が見本として聞くために非常に適しているという印象です。授業内で読めない単語・文章がある場合は、タブレットから音を出してよいという指示を出し、使用を推奨しています。まだ使用している生徒があまり多くはありませんが、使用した生徒からは「自分の作った文のお手本が聞けてよかった」「テスト勉強でも使いたい」などの声も聞かれ、これからの使用拡大に大きな期待を寄せています。

3-1-3 活動を習慣化させる

夏休みに入るまで、例１・例２のような５分程度でできるやり取りを、できるだけ多く（授業２回につき１回の目安で）取り入れるようにしました。毎回の定番になってくると飽きてしまう生徒が多いのではないかと懸念していましたが、休み前に「授業内のやりとりの頻度」についてアンケートをとったところ、「ちょうどいい」「もっとやりたい」と答えた生徒のほうが多いという結果でした。生徒の様子を見ていても、「台本作り」→「じゃんけんをして発表」という流れが「習慣」となってきて、特に英語が苦手な生徒も「とりあえず例文の中から選んで書けば大丈夫」という認識になってきたように感じました。今後もこの頻度を継続し、生徒にどのような変化があるのかを注視していきたいと思います。

※レポートは、２何が対話を妨げるのか　2-1 人間関係的要因に対するアプローチ、３課題と展望、４おわりに　と続きます。レポート全文は、教文通信デジタル版№33に掲載しています。

教文通信写真館　エッセイつづき

声を聞き見上げると、そこにはアオゲラが

日本固有種で海外から訪れるバードウォチャーあこがれの鳥のひとつです。信州では平地の林から山地まで見られ、声もよく聞かれます。キツツキの仲間を「ケラ」と呼び、信州では他にアカゲラ、オオアカゲラ、コゲラといったキツツキが見られます。いずれも木に穴をあけ巣をつくりますが、古巣は他の鳥や小型のほ乳類が巣として再利用します。樹洞を利用する鳥や獣にとってキツツキのつくる樹洞は貴重な資源となっています。

秋の学び 教研シーズンが始まります
それぞれの支部 あるいは支部を越えて 教研参加を!

支部	支部教研日程	支部教研会場	支部	支部教研日程	支部教研会場
高水須坂	8月9日（金）13:00～16:00	長野立志館高校	上伊那	9月14日（土）	箕輪進修高校
長水	10月5日（土）9:30～12:30	各分科会で設定	下伊那	9月28日（土）	飯田OIDE長姫高校
更埴	9月21日（土）10:00～16:00	篠ノ井高校	木曽	9月下旬	木曽地域
上小	9月 7日（土）8:55～12:30	上田市立真田中学校	松筑	9月21日（土）	松本県ヶ丘高校
佐久	10月4日（金）8:45～16:00	佐久平総合浅間キャンパス	安曇	9月下旬	豊科高校
諏訪	10月5日（土）	岡谷工業高校	詳細は後日、教文通信デジタル版№34でご紹介します		

2024教育のつどい in 大阪に、長野県からは19名が参加。既に実施された支部もありますが、支部教研から県教研へ。秋の教研シーズンの始まりです。

2024教育のつどい in 大阪（8/16-18）
暑い暑い大阪で　熱い討論

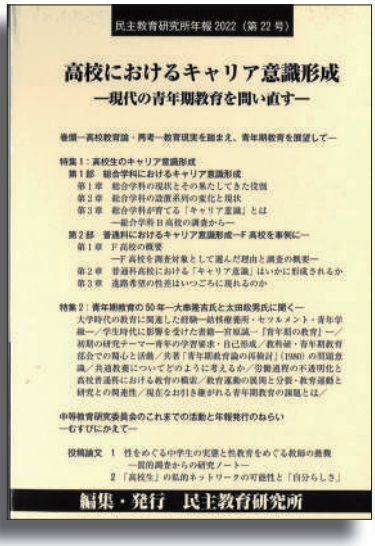
書籍紹介　購読

若者とともに 地域をつくる 学校を変える 社会・政治を変える 宮下与兵衛著（かもがわ出版）

「なぜ、日本の若者はさまざまな活動に参加しないのか。どうしたら若者が関心を持つようになるのか。若者が参加しているところではどんなことをして成功しているのか。この本ではそうした疑問や要望にこたえられるよう、日本だけでなく、気候変動防止活動などさまざまな課題で「世界の若者たちが社会変革を担う時代を迎えている」と言われている欧米の若者たちの活動と、何がそうした若者たちを育てているのか紹介していきます。また、国内で若者を主体的な市民、つまり主権者に育てている学校での取り組み、自治体での取り組み、職場での取り組みについて紹介していきます。」（まえがき　より）

高校におけるキャリア意識形成 民主教育研究所

第３回総合研究会「高校生のキャリア意識形成」を考える総合研究会では、総合学科は高校生のキャリア意識をどう形成するのか、普通科の自治活動はキャリア意識形成にどう貢献するのか、「教育改革」が進められる今、そこから何を学ぶのかについて考えました。その折の民研中教研報告が掲載されています。購入ご希望の方は、教文会議までご連絡ください。（民主教育研究所にも残部はほとんどないとのことです。）



教文会議　当面の日程
8月28日　県教研ニュースNo.1発行
9月2日　教育課程研究協議会総則特活（南信）
9月6日　教育課程研究協議会総則特活（中信）
9月9日　教育課程研究協議会総則特活（東信）
9月13日　教育課程研究協議会総則特活（北信）
9月14日　参加と共同の学校づくり・地域と子ども研究会　全県研究会
教育研究者　鈴木大裕さん講演会
既配布のチラシをご覧ください。